

1. はじめに

「ケアプラン」、「ケアパッケージ」、「ケアガイドライン」という名詞的な使い方、あるいは「ケアしていただく」といった動詞的な使い方、あるいは「あなたのケア」「私のケア」と帰属する使い方、という具合に私たち看護師の周りには「ケア」という言葉があふれています。「ケアは看護の本質であり、看護の中心的・優先的・統合的焦点である」[※]とレイニンガーが述べるように、ケアが看護の本質である以上、看護師が日常的に「ケア」を用いることは当然のことです。

ところが「ケアとは何か」と改めて問われると言葉に窮することはないでしょうか。少なくとも私は一言で返すことができません。というのはケアの概念が広すぎるからです。例えばカブトムシを一度も見ることがない子どもに「カブトムシとは何か」を伝える時、多くの言葉を駆使して伝えようとするでしょう。しかしどれだけ言葉を尽くしても、その子が正確に「カブトムシとは何か」を理解することはできません。実際にカブトムシを見て、もっと言うと卵から孵化した幼虫が成虫となり一生を終えるまで観察し、カブトムシの生態を理解して初めて「カブトムシとは何かを理解した」と言えます。

特徴的な形態を持つ昆虫一種類

シリーズ『見る』 ということ

～看護師の私は何をする人ぞ～

第12回 「ケアとは何か」を考える
(最終回) ーそばを離れないということー



株式会社N・フィールド
居宅事業本部 教育専任室
精神看護専門看護師

中村 創氏

「それでは本稿のタイトルが成立しないではないか」というご批判もあると思いますが、本稿はあくまで「ケアとは何か」を言葉で考えます。

2. 痛みと共にいる覚悟

ー「俺をひっぱたいてくれ」という懇願ー

認知症の進行により、夜間頻回

に自宅から出ては警察に保護されることを繰り返していた患者さんが入院しました。80代前半で思わず可愛いという印象を相手に与える小柄な男性でした。奥さんと二人暮らしでしたが、医師からは「在宅復帰は難しいかもしれない」と言われていました。

奥さんは毎日お見舞いに来ていました。30分前のことは覚えていられない方でしたので、奥さんの顔を見るたびに「なんて昨日来てくれなかったのよ」と、挨拶代わりの一言が日課になっていました。

奥さんは何とか自分が来たことを残しておこうと思ったのでしよう、卓上カレンダーを用意し、お見舞いに来た日をマジックでチェックしておられました。「お見舞いに来た日を分かってもいい」という工夫でした。ご家族の写真を手帳サイズのアルバムに入れて床頭台に置いてもらいました。家族仲の良さがうかがえる光景でした。ご本人はカレンダーが何であるかは分かりますが、チェックが何を意味するかまでは分からない様子でした。

入院から2カ月が経過した、ある肌寒い秋の夕方でした。私は部屋を通りすがりに彼にあいさつしたところ、血相を変えベッドから立ち上がった彼は私の両腕をつかみ「なあ、カレンダーの日にちマジックでバツ印を付けてるけど、

あれってあいつ（奥さん）が来たってことなんだろう？今日何日なんだ？」と質問しました。鬼気迫る勢いでした。

認知症には独特の波があります。その日の昼過ぎまでボーっと霧がかかっていたような方が、夕方にサッと霧が晴れることもあります。その表情や語気から私は霧が晴れていることに気づきました。

私は今日が何日であるかを伝えました。カレンダーのその日はすでにチェックされた後でした。

日にちを告げられた彼は普段見せたことのない顔で泣き始めました。「俺、あいつが来たことまるっきり覚えてないんだ。これまで来たことも覚えてないんだ。情けないよ。本当に情けない。なあ、頼むから、今度あいつが来て、俺がそのこと忘れていたら俺のことひっぱばたいてくれ。頼む、俺のことひっぱばたいてくれ。頼む」と肩を震わせながら私にしがみつきました。

何度も繰り返される「頼む」「ひっぱばたいてくれ」が鳴咽で聞き取れなくなってきました。私の腕をつかんだままの彼の両手からは無念さがあふれ出していました。私はその手を握り返し続けました。

腕を握り合ったまま部屋で立ち尽くす男性が二人。やがて日が沈もうという頃に鳴咽が治まってき

ました。「悪かったね」、そう一言つぶやいたのち彼はベッドで布団をかぶってしまいました。私は「いえ、では」「また来ますね」と言い、その場を後にしました。

「なんとかその場を離れたい」「治めなければ」「話をそらしたい」という横やりが容赦なく私に襲い掛かりましたが、私はそばを離れませんでした。私はその場で彼の悲しみを「無かったことにしてはいけない」と考えていました。彼の悲しみの表現を「どうでもいいもの」として扱うことができなかったからです。

「もう泣かないで、大丈夫だから」といさめようとすることは、その涙を「無かったことしよう」とする試みなのです。乱暴に言うなら「その涙には価値がない」というメッセージになりかねません。それは相手の感情への冒涇でさえあるのです。相手が発するものを「どうでもいいもの」として扱うことはケアではありません。翌日の彼がその涙を覚えていたかは定かではありませんでした。しかし何年たっても私には鮮烈に残っている場面の一つです。

3. ケアとは

―痛みと共にいる覚悟―

「I don't care. は」「どうでもいい」「興味がない」などの意味を持ちます。「ケアをしない」ということは、「食事介助をしない」

「接遇を守らない」「声掛けをしない」という行為以前に「相手に興味を持たない」ということです。逆に言うと「相手に興味を持つところ」からケアは始まります。

私たち看護師は相手に興味を持つ責任があります。相手に興味を持つということは相手を理解しようとすることです。相手を理解するためには相手のそばにいるより方法がありません。

「看護は、その人のところに行く」ということ以外に手はありません^{※1}。という寺本松野の言葉通りです。記録用紙のような数字や言葉だけで人間を理解することはできないのです。看護の対処となる人間を理解しないまま看護はできません。看護をしないということは仕事を放棄することです。

しかし痛みを持つ人に興味を持つということとは、少なからず相手の痛みと何らかの関係を持つということとです。それは自身が痛みを被る覚悟を固めることでもあります。「関係する」ということは自分もその痛みの中に入るといことだからです。わざわざ他者の痛みに入るということを生業にする看護師は大きな苦悩を伴う仕事のひとつと言えます。けれど、その苦悩を引き受ける態度こそが人生に意味と価値を与えてくれます^{※2}。

決して安易な道ではありません。避けることもできません。う。しかし避けるということはケアをしないことなのです。他者の苦痛と関係を持たないところにケアは成立しないからです。「受苦せし者は学びたり」^{※3}というギリシャの諺を中村雄二郎が紹介している通り、私たちは患者さんの痛みに入ることでしか学べないのです。ですからそばを離れないことを続けなければいけません。ケアとはそばを離れないことなのです。共に涙を流すこと、共に悩むこと、共に笑うことを業務上の特権として与えられているのですから、その機会から遠ざかるべきではありません。皆様の臨床での一日が患者さんと共にある時間であることを心から願っています。

参考文献

- ※1 Leininger, M. (1992/1995). サチコクラスほか(訳). 稲岡文昭(監訳). レイニンガー看護論―文化ケアの多様性と普遍性. (p.38). 医学書院.
- ※2 寺本松野. (2001). 看護は祈り 寺本松野ことは集. (p.35). 日本看護協会出版.
- ※3 Taguchi, Y. (1993). 山田邦男, 松田美佳(訳). それでも人生にイエスと言ふ. (pp.37-38). 春秋社.
- ※4 中村雄二郎. (1992). 臨床の知とは何か. (p.136). 岩波書店.